飛び出せ学校

この新聞は、豊後大野市犬飼小学校の６年生（山下進也教諭＝26人）が、大分合同新聞社の記者と一緒に作りました。

用語解説

ジオパーク
地球・大地（ジオ）、公園（パーク）を組み合わせた言葉です。大地の公園を意味していて、楽しんで学べることもできます。他にも、地球科学的な価値をもつ遺産を保全し、教育やツーリズムに活用しながら持続可能な開発を進める地域認定プログラムでもあります。

ジオサイト
ジオパークの見どころであって、地球の活動がわかる地質や地形があり、地質学的な見所を見学することができる場所です。多くの人が将来にわたって地域の魅力を知り、利用できるよう保護を行っています。ジオパークとともに、４年に１度再認定審査があり、基準を満たしていれば再認定されます。

（強・弱）溶結凝灰岩
溶結凝灰岩とは、火山の噴火によって火砕流が流れて冷えて固まってできた岩のことです。豊後大野市にある溶結凝灰岩は、９万年ほど前に起きた阿蘇山の噴火によってできました。圧力によって押しつぶされてできた溶結凝灰岩は、中の軽石がガラス化していたり、黒い帯状の模様を断面に見たりすることができます。強溶結凝灰岩は硬く、弱溶結凝灰岩が加工しやすいという特徴があります。犬飼町の「犬飼石仏」と「犬飼港跡」で見ることができます。

柱状節理
火山から流れ出た溶岩がゆっくりと冷えて固まった規則正しい割れ目のことです。角柱状の柱のような割れ目で、角柱の断面は、六角形が多いのですが、必ずしもそうではなく、四角形、五角形、七角形、八角形のものもあります。

私たちが住んでいる豊後大野市は、日本ジオパークに認定されていて、ジオサイトがたくさんあることが自慢です。私たち６年生は、「犬飼」「石橋」「滝」について調べました。「犬飼」の学習では、溶結凝灰岩に立派な石仏が彫られていることがわかりました。「石橋」の学習では、アーチ幅が日本１、２位の橋が並んで造られていることがわかりました。「滝」の学習では、溶結凝灰岩が時間の経過で削られて、今の滝の形になったことがわかりました。私たちが学習した豊後大野市のジオパークを知ってもらい、ぜひ見に来てほしいと思います。

大分合同小学生新聞
発行者
豊後大野市犬飼小学校
６年生

「出会橋」「轟橋」は、清川町左右知にあって、見たり、実際に渡ったりすることができます。出会橋は、1924（大正13）年に架けられました。アーチ幅は29.3㍍で日本の石橋の中で２番目のアーチ幅を誇っています。全長32.2㍍、幅3.9㍍で形式は単アーチ橋で材料は石で造られています。橋から見る柱状節理はとてもキレイで橋の下にはポンプ小屋が見えます。

轟橋は、1934（昭和９）年に架けられました。アーチの幅は右岸側が32.1㍍、左岸側26.5㍍で、右岸側の径間は日本国内の石橋で最長です。全長68.5㍍、幅2.5㍍、高さ27㍍で形式は２連アーチ橋で材料は石で造られています。豊後大野市資料館主幹の後藤祥さん（48）の話だと、昔、トロッコ列車が通るために造られたそうです。

後藤祥さん

この学習の中で後藤さんのおススメで「岩戸の景観」にも行きました。大野川の本流と奥岳川が合流する場所に高さ50㍍、長さ500㍍にわたる大絶壁があります。岩壁に掘られたトンネルから列車が飛び出してくる光景は、鉄道ファンの聖地になっているようです。

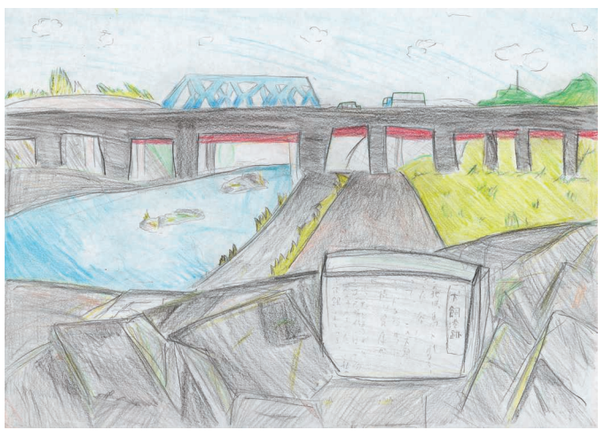
轟橋（手前）と重なって見える出会橋

犬飼町には、高さ3・76㍍で大分県の中で３番目に高い「犬飼石仏」があります。私たちは、元犬飼小学校校長で現在はボランティアガイドをされている安藤恒美さん（86）にお話を聞きました。石像は３体あり、並びは、真ん中に不動明王、左右にこんがら童子とせいたか童子がいます。この石仏は、弱溶結凝灰岩を削って造られています。また、犬飼石仏には歌人の与謝野晶子さんが訪れていて、「犬飼の山の石佛竈さえもともに染みたり淡き朱の色」と詠まれた歌が石に刻まれていました。

安藤恒美さん

国指定史跡の犬飼石仏と与謝野晶子さんの歌碑

この学習の中で、安藤さんが「自分を見直し、ビクビクしたり、キョロキョロせず、不動明王のように自信をもってほしい」と話してくれたことが印象に残っています。


犬飼港跡の全体風景

犬飼港跡は、強溶結凝灰岩を加工した石畳がある港です。犬飼港は、岡藩の人たちが、参勤交代の時、また、米や農産物を運ぶために造られたそうです。川の下は深く掘って大きな船が通れるようになっています。そして、この港跡には、大野川層群という地層があり、ギザギザした特徴的な岩を見たり、乗ったりすることができます。犬飼港跡は、溶結凝灰岩と関わりが深く、参勤交代や物を運ぶためいろいろな工夫がされている場所です。

そして、ぼくたちは、安藤恒美さんに犬飼港跡についての話を聞きました。参勤交代の航路のため、また、大野川を中心に岡藩と臼杵藩に区切りがあった理由のために苦労をして犬飼港を造ったそうです。また、戦国時代、年貢は、７万頭近くの馬によって、犬飼港にある御蔵所に運ばれ、検査を受けてから積み出されていたことも分かりました。他にも、犬飼港跡には、当時の渡航の安全を祈願するために刻まれた「波乗り地蔵」を見ることができます。みなさんもぜひ犬飼町に来てください。

私たちが作りました

㊤東洋のナイアガラと呼ばれる原尻の滝
㊦雄滝と雌滝のぶつかりによって生まれた沈堕の滝

豊後大野市のジオサイトには三つの滝があります。私たちが学習で行ったのが、「原尻の滝」「沈堕の滝」です。原尻の滝は「東洋のナイアガラ」と呼ばれており、約9万年前、阿蘇山が噴火した際に谷を埋めた火砕流が冷えて固まった後、再び水が流れ始め浸食されて今の形が形成されています。崖面には、柱状節理を見ることができ、馬てい形の珍しい形です。

「沈堕の滝」は雄滝と雌滝に分かれていて、雄滝の幅が100㍍、高さは18㍍で雌滝の幅が10㍍、高さが18㍍です。室町時代には、水墨画で有名な雪舟が訪れ、作品を描いた「鎮田瀑図」としても有名です。

他にも、水の流れを利用した水力発電所の跡もあります。現地学習の際、後藤祥さんから、昔、沈堕の滝は船では通りにくい難所と言われたことや、雄滝の横の崖面には魚道跡があることをうかがいました。

新聞ができるまで

豊後大野市犬飼小　地域の宝、魅力を再認識

「おおいた豊後大野」として日本ジオパークに認定されている豊後大野市。市内の各小学校は地域の宝を学ぶ郷土学に取り組んでいる。同市犬飼町久原の犬飼小学校は特に力を入れている学校の一つ。新聞作りを通じて魅力をさらに知り、ふるさとへの思いを深めた。

「皆さんの住んでいる町には誇るべき史跡や文化、歴史がたくさんある。自分たちで調べ、新聞記事を書いて市外の人に自慢してください」。大分合同新聞社豊後大野支局の山田志朗記者（49）から取材のこつを教わった子ども記者は、ジオサイトに詳しい人たちから話を聞こうと教室を飛び出した。

㊧豊後大野支局の山田志朗記者から取材の仕方などを教わる（2021年７月７日）㊥犬飼港跡について現地で説明を聞く児童ら（８月30日）㊨書いた記事を読み込んで見出しを考えた（11月16日）

大分合同新聞 プレミアムオンライン Gate ゲート
動画
新聞づくりの様子をご覧いただけます

同町が誇る国指定史跡「犬飼石仏」や「犬飼港跡」では同校の元校長でボランティアガイドの安藤恒美さん（86）に質問。９万年前の阿蘇山大噴火の火砕流が冷え固まってできた溶結凝灰岩を利用していることなどを学んだ。

町外にも足を延ばした。清川町では仲良く並ぶ二つの石橋「轟橋」「出会橋」について学習。市資料館の後藤祥主幹（48）から、それぞれのアーチ幅が国内１、２位の長さを誇ることを聞いた。緒方町の「原尻の滝」や大野町と清川町の境にある「沈堕の滝」の魅力も探った。

取材後、大分合同新聞社ニュース編集部の川野剛志記者（27）の指導で見出しやレイアウトを考え、カラフルなイラストを添えた新聞を作り上げた。

この企画は小学生（主に５、６年生）が、地域の魅力や課題を取材し、新聞にまとめる作業を通して古里を見詰め直すことを目的としています。問い合わせは大分合同新聞社地域連携室「飛び出せ学校」係へ。☎097・538・9729、Ｅメールnie@oita-press.co.jp